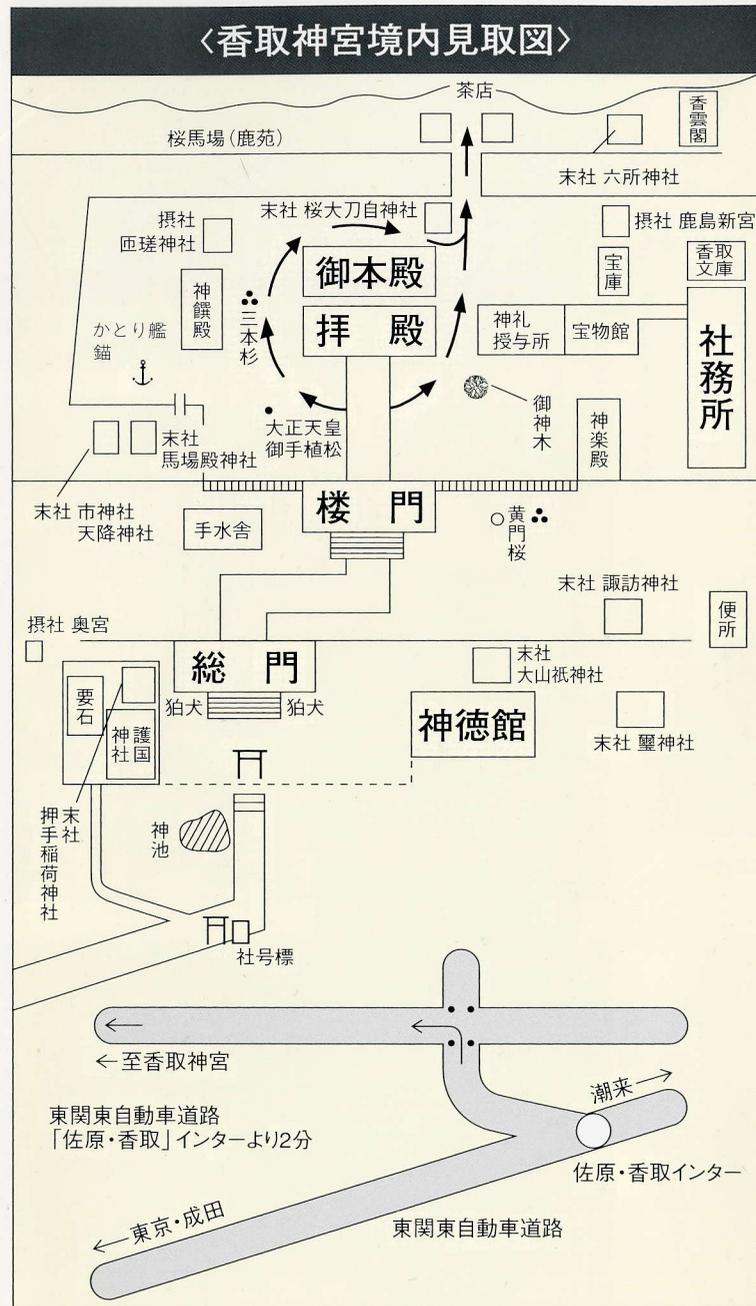


発行・香取神宮社務所



撮影・印刷 艸藝社



楼門 Romon-Gate

目もあざやかな朱塗の楼門は最も壮麗である。掲額は世界的に名将の誉ある東郷平八郎元帥の筆である。楼門右前には黄門桜といわれている水戸光圀御手植の桜がある。尚本門は元禄13年の建造(重要文化財)である。

香取神宮御由緒

鎮座地 千葉県香取市香取

御祭神 経津主大神(ハツヌシノオオカミ)(又の御名伊波比主命(イハヒヌシノミコト))

御事歴 大神は天照大御神の御神意を奉じて、鹿島の大神と共に出雲国の大國主命と御交渉の結果、円満裡に国土を皇孫に捧げ奉らしめ、更に国内を御幸して荒振る神々を御平定され、日本建国の基を御築きになり、又東国開拓の大業を完遂せられて、平和国家の建設と民生の安定福祉に偉大なる御神威を顕わされた。

御神徳 古来国家鎮護の神として皇室の御崇敬最も篤く、特に「神宮」の御称号を以て奉祀され、名神大社として下総国の一の宮である。明治以後の社格制では官幣大社に列せられ、その後勅祭社に治定せられて今日に至っている。

奈良の春日大社、宮城の鹽竈神社を始めとして、香取大神を御祭神とする神社は全国各地に及んでおり、昔からの伊勢の上参宮に對し下参宮と云われ、広く上下の尊崇をあつめて居る。又一般からは産業(農業・商工業)指導の神、海上守護の神或は心願成就、縁結、安産の神として深く信仰されている。尚その武徳は平和、外交の祖神と敬われ、勝運の神、交通安全の神、災難除けの神として有名である。

御社殿 宮柱の創建は神武天皇御宇十八年なる由香取古文書に記されている。

去る昭和三十三年四月御鎮座二千六百年祭が盛儀を以って齎行せられた。古くは伊勢神宮と同様式年御造宮の制度により、御本殿を二十年毎に造替されたのであるが現在の御社殿(本殿・楼門・祈禱殿)は元禄十三年(西暦一七〇〇年)徳川綱吉の造宮に依るものである。昭和十五年国費により拝殿の改築と共に御本殿以下各社殿を御修宮し、その後昭和五十二年から三年の歳月を懸けて御屋根葺替・漆塗替が行われた。構造は本殿(重要文化財)、中殿、拝殿相連れる所謂権現造である。

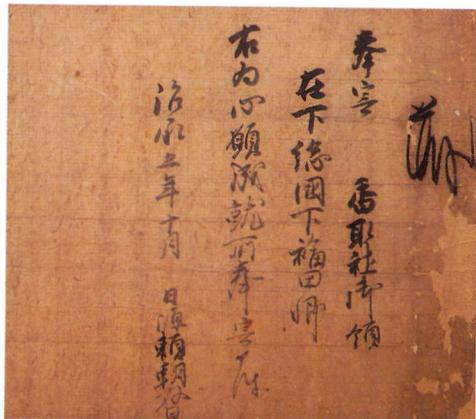
境内 香取の神域は大槻郷龜甲山と呼ばれ県の天然記念物に指定され、その面積は一二三、〇〇〇平方メートル(約三万七千余坪)で他に境外社有地がある。神域内は老杉鬱蒼として森嚴の氣自ら標を正さしめる。



国宝 海獸葡萄鏡 一面  
直径二十九・四釐、中國隋時代の作品で、奈良正倉院御物及び四国大山祇神社の神鏡とを合せて日本三名鏡と称するがその随一。鏡裏の内区に八頭の觀海馬と十三頭の子海馬の戯れる一状を葡萄唐草の上に配し、外区には葡萄唐草の上に雞雉鹿朱雀の雌雄を配している。



重文 古瀬戸黄釉狛犬 一對  
南北朝時代の作品。古瀬戸の狛犬としては優秀の作である。



県文 源頼朝公寄進状



#### 神 殿 Shinden (Worship Hall)

宮柱の創建は 神武天皇18年 なる由古文書に記されているが、現在の御本殿は元禄13年徳川綱吉公の御造営である。

拝殿は昭和15年国費をもって改築せられた檜皮葺屋根、黒塗権現造りの典雅な社殿である。その長押上には極彩色の蓼股があり、禽獣花鳥の彫刻がその黒塗の社殿に渾然と調和して賽者の心気をおのずから改まらせる。又その脇には樹令約 1,000年と称せられる根廻り約10m余りの御神木がある。

#### 朱塗の大鳥居

香取神宮参道正面にある第二の鳥居である。鳥居の朱と周囲の老杉の緑とが良く調和して、神域の入口にふさわしい美観を呈しております。



香取神宮略年表

年号 西暦

神武天皇十八年 西暦 六三一  
 舒明天皇三年 西暦 六四三  
 皇極天皇二年三月 西暦 六四三  
 聖武天皇天平四年 西暦 七三三  
 延暦二十年 西暦 八〇一

弘仁三年六月 西暦 八二二  
 齊衡三年二月 西暦 八五六  
 延喜五年 西暦 九〇五

永承元年 西暦 一〇四六  
 治承五年 西暦 一一八一  
 文永八年 西暦 一二七一

觀応三年七月十三日 西暦 一三五二  
 応安七年二月十日 西暦 一三七四  
 天正十八年五月 西暦 一五九〇

天正十九年十一月 西暦 一五九一  
 天正二十年 西暦 一五九二  
 慶長十二年 西暦 一六〇七  
 貞享元年三月 西暦 一六八四

元禄十三年 西暦 一七〇〇  
 天保五年三月 西暦 一八三四  
 嘉永六年十一月 西暦 一八五三

安政元年三月 西暦 一八五四  
 文久二年三月 西暦 一八六二  
 明治元年十二月九日 西暦 一八六八

明治四年五月十四日 西暦 一八七一  
 明治四年十一月十五日 西暦 一八七一  
 明治五年二月 西暦 一八七二

明治五年八月 西暦 一八七二  
 明治四十四年五月 西暦 一九一一  
 昭和四年八月 西暦 一九二九

昭和十五年 西暦 一九四〇  
 昭和十七年一月 西暦 一九四二  
 昭和二十六年十一月一日 西暦 一九五一

昭和二十九年四月 西暦 一九五四  
 昭和三十三年四月 西暦 一九五八  
 昭和四十年十一月 西暦 一九六五

昭和四十一年四月 西暦 一九六六  
 昭和四十八年十月 西暦 一九七三  
 昭和四十八年十月 西暦 一九七三

社殿創立(正和五年香取古文書)

はじめて神領地を定む(總國風土記)  
 勅使奉幣(類聚國史)  
 天下大旱天祈雨、社号を改め神宮号とする。

坂上田村麻呂参拜。この年征夷大將軍に任ぜらる。陸奥地方平定の際参拜したと思われる。

御社殿造替(日本後紀)二十年ごと(に嗣後改めてつく。)  
 神階正一位勲一等。勅使小山中島麻呂差遣。

延喜式制定である。延喜式神名帳下總國香取神宮名神大月次新嘗とあり當時伊勢の皇大神宮の外に神宮の称号は香取、鹿島のみであった。更に香取郡を神郡となし二十年に一度の式年遷宮の制を定めらる。

源頼義参拜。天下泰平社頭繁榮子孫長久を祈ったといわれる。三本杉現存。源頼朝神領寄進、下福田郷。古文書現存。

龜山天皇蒙古來寇に際し国家安穩祈願。神号頒御奉納。  
 足利尊氏御御教書。香取古文書による下總國大頭郡寄進。  
 室町將軍教書(香取古文書) 御社殿造替の事。  
 浅野長政禁制状。神領地として下總國香取十二ヶ村同大戸六ヶ村云々とある。(香取古文書)

徳川家康神領地千石寄進。  
 大久保長安禁制(香取古文書)  
 御社殿御造替。元龜二年より中間三十七年徳川執政のはじめ。  
 水戸光圀参拜。桜御手植(樓門前に黄門桜あり)

以後昭和十三年まで二百三十九年間大造管はなし。  
 水戸斉昭参拜。患みある風にしられていちぢるし香取の宮の花の盛は」とと黄門桜をよんだ。  
 孝明天皇米船浦賀に渡来につき退散祈禱仰せつけられる。  
 右折禱、正、五、九の三回仰せつけられる。

孝明天皇米三十三石御奉納。  
 勅使参向。御太刀(藤原清光作)一口御馬代黄金二枚、関東奥羽鎮定御報費。官幣大社列格。  
 大書院班幣使。  
 祈年祭奉幣使。  
 宣命使参向。自今例祭および祈年新嘗の三祭は地方長官を以て奉幣使として参向せしむ。

大正天皇御参拜。松をお手植、樓門内にあり。  
 拜殿御屋簷替。  
 神祇院直轄にて御社殿以下建造物大改修工事。  
 勅使社御治定。以後昭和二十三年まで毎年勅使参向。  
 貞明皇后御遺品銅製寿聖愛亀置物御奉納。

戦後初の式年神幸祭勅使参向。  
 御鎮座二千六百祭。岸總理大臣太刀(備前利恒銘)一口奉納。  
 楼門、宝物殿、神籬殿、手水舎總門銅板による屋根替完了。  
 式年神幸祭。勅使参向。  
 天皇・皇后両陛下御親拜。  
 昭和天皇・皇太后両陛下御親拜。

昭和五十二年十一月 西暦 一九七七 御本殿重文指定。  
 昭和五十三年十月 西暦 一九七七 御本殿遷座祭・奉幣祭、勅使参向。  
 昭和五十八年十二月 西暦 一九八三 式年神幸祭、勅使参向。  
 平成二年四月 西暦 一九九〇 式年神幸祭、勅使参向。  
 平成四年十一月 西暦 一九九二 今上陛下・皇后陛下御親拜。  
 平成十二年二月 西暦 二〇〇〇 香雲閣登録有形文化財指定。  
 平成十三年四月 西暦 二〇〇一 拜殿・幣殿・神籬所登録有形文化財指定。  
 平成十四年四月 西暦 二〇〇二 式年神幸祭、勅使参向。

香取神宮の主な祭典

歲旦祭 一月一日  
 年の始めにあたって皇室の安泰と氏子崇敬者を始め国民の繁栄とを祈る祭りでである。  
 節分祭 二月初五日  
 年男多数参列して盛大に行なわれる招福追儼の儀式で鳴弦の儀、神人の追儼舞など奉せられ、福銭福品の授与がある。

祈年祭 二月十七日  
 一年の五穀豊稔を祈って行なわれる大祭である。  
 御田植祭 四月第一土曜・日曜日  
 一般に「かとりまち」と云われ風水害もなく無事に田植も終え秋の豊稔ならんを祈るお祭で、耕田式田植式と八人の稚児が早乙女を奉仕し、田圃など亘せられ華やかな特殊神事として一日間土・日に亘って行なわれるが、苗木市などが開かれ、年中最大の股賑を極める。

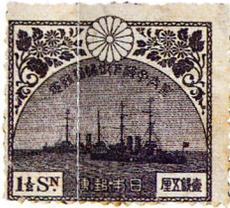
例祭 四月十四日  
 大祭中最重要な祭儀で、皇室より御幣物の御奉納があり、天皇の弥栄と氏子崇敬者始め国民の福祉を祈って厳粛に行なわれる。  
 神幸祭 四月十五日  
 桜花咲き競う頃御神輿を中心に旧八か町村氏子が供奉して盛大に行なわれる。特に午年十二年毎の式年大祭の豪華絢爛さは全国祭事中の圧巻である。

新飯神事 十月十七日  
 新穀を赤飯に炊いて奉納し神賑に青年力士の奉納大相撲がある。

新嘗祭 十一月二十三日  
 天皇が今年の新穀をきこし召されるについて皇祖を始め諸神に御供進遊ばされるのであるが、当宮においても新穀を奉納、「秋のかとりまち」として報恩感謝の誠を捧げる大祭である。  
 大嘗祭 十一月三十日夜  
 古式床し当宮独特の新穀感謝の神事で数々の神饌は珍らしい熟練を以てして、大和舞の奉奏が行なわれ旧社家の人々も奉仕して篝火に映える祭儀は典雅莊重を極める。  
 賀詞祭 十二月一日夜  
 古神事の一つで大嘗祭の終了をお祝いする厳粛なお祭りである。  
 内陣神楽 十二月四日夜  
 年中五箇度御扉開の終の祭儀で宮以下神職のみ奉仕して厳粛の裡に行なわれる。  
 団書祭 十二月七日夜  
 八石八半団子祭とも言われ新穀で団子をつくり奉納する五穀成熟感謝のお祭りである。年中祭典中神酒の奉献がない珍らしい神事で比売(ヒメ)神慰勞のお祭りとも言われる。

月次祭 毎月一・十四日  
 月の始めと祭神様の日(四月十四日例祭)にその月の平安と繁栄を祈る祭儀である。

異文 神号額 一面  
 額面に「正宍位勲一等香取大明神」とある。檜板製で社伝によれば、龜山上皇宸筆と称するが、その他は詳かに知り得ない。文永八年蒙古來寇の折、国家安穩祈願の為奉納された額額と伝える。



「軍艦香取」記念切手



「軍艦香取」紋章

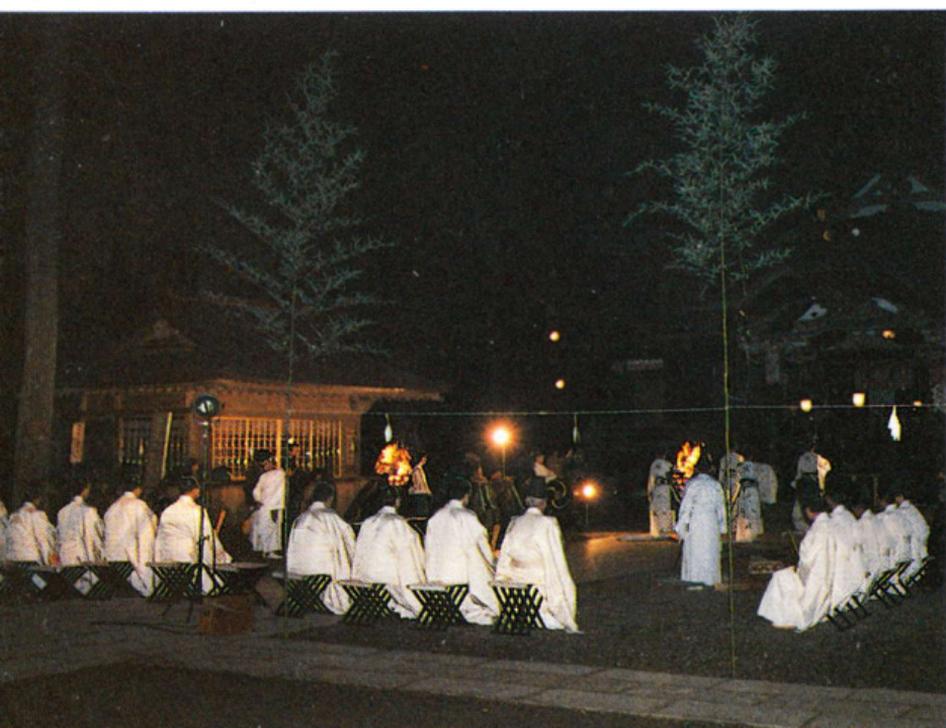
異文 神号額  
 柄鏡で大形品、背面は砂目地に神号と奉納銘が陽鑄されており、最初から奉納鏡として作製されたもので、元禄八乙亥歳九月吉日と刻されている。



御田植祭 早乙女手代の田植



神幸祭 四月十五日



大饗祭 十一月三十日